
世紀末怪盗譚

空木芥舟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世紀末怪盗譚

【Nコード】

N9670Y

【作者名】

空木芥舟

【あらすじ】

産業革命後のある国の、とある港町では今日も釣り糸を垂らす男の姿が見られる。怪盗と探偵が実在し、互いに競い合っていた美しい時代は幕を閉じ、社会は巨大な装置の様相を呈しはじめていた。

防波堤で

夕暮れの海辺、真新しいコンクリート製の防波堤の上に、人影が一つ見受けられた。

「釣れますか？」

後ろから声をかけると、くたびれた服を着た男の人は振り返って、なにも云わずに横に置かれたバケツを顎でしゃくった。

ところどころ朱く錆びて、ひしゃげたブリキのバケツの中には小魚が数匹、ぴちぴちと跳ねる元気もなくして浮かんでいた。

沖合の蒸気船が汽笛を鳴らす。黒い影がゆっくりゆっくり紅く染まった水平線を渡ってゆく。海に沈みつつある夕日の手前を横切ってゆく。わたしは防波堤に腰掛けて、足をぶらぶらさせながらそれを眺めていた。

男は水面から釣竿を上げ、左手にバケツを下げて立ち上がる。今日はもう店じまい、ということなのだろうか。夕日を背に街へと帰ってゆく男の、さして広くもない背中をぼんやりと目で追っているうちに、わたしはなぜか夕餉のメニューのことを思い出してしまふ。そんなわけでわたしも早いところ帰ることにして、岸壁から腰を上げたところ、視界の端にやけに白いものが入った。近寄って拾いあげてみると、夕日を浴びてやけになまめかしく光るそれは、どうやら一揃いの手袋らしい。

材質は絹、おそらくは街の高級店のショウウィンドウの向こうに並べられているものの一つ。

先程の男のものだろうか、風采の上がない中年男と、高価な婦人用手袋を繋ぐものを想像するのは難しかったが、男が釣りをして

いる間「これ」がわたしの目に入らなかった以上、おそらくは彼に
関係する品だろうと考えて、わたしは珍しく親切心を働かせ、手袋
を男の元へ届けることにした。

はく息が少し荒くなるほどの距離を小走りでゆくと、男はあつさ
りと見つかった。港から真っ直ぐ伸びて旧市街へ入っていく通りを、
釣竿とバケツを持ってゆつくり歩く人影は簡単に見分けがついた。

太陽はほぼ完全に沈んでいるのに、空はまだ明るく、濃い紺色か
ら淡い藍色へのグラデーションが、東から西へと広がっていた。空
の、わたしの語彙にない色をした部分を眺めていると、炊事の煙が
旧市街の家々からもれでてきて、わたしはまた夕餉のメニューのこ
とを思い出す。

あわてて視点を男に戻すと、ちょうど家へ入ってゆくところだっ
た。古い建物が立ち並ぶ旧市街の中でも、一際古びた家だ。かつて
は金持ちが住んでいたのか、古風ながらも洒落た造りで、知識がな
いわたしでも感銘を受けるほどだった。フォサードは綺麗に掃除さ
れていたが、それだけに割れたまま修理されていない窓硝子が痛々
しかった。

家、と云うよりも館と呼んだほうが相応しいほどの建築に気圧さ
れながらも、わたしは一步を踏み出し、ドアをノックする。気が付
けば握りしめていた手袋をちらりと見ると、縫い取られたイニシヤ
ルが読み取れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9670y/>

世紀末怪盗譚

2011年11月29日00時57分発行